

須宮田

田城辺

哲謙正

夫一男

共編

校註

伊勢物語

若樹出版

校 註

伊

勢

物

語

校註 伊勢物語

昭和四十一年四月五日四版發行

編者 田宮 正 須城 謙一

發行者 安倍 玲子

印刷者 磯貝 兌雄

東京都豊島区池袋東一の五六
足柄製版印刷株式会社

發行所 若樹出版

東京都中央区銀座西七の六東建ビル内
電話 五八一・二二〇九
振替 東京 一一三九二

定価 320 円

伊勢物語の研究は早く平安末期にはじまった。その業績の質と量は源氏物語のそれに匹敵する。近年における文献学的・民俗学的、また歴史社会学的研究はいよいよさかんであるが、なお未解決の問題は多く残されている。

伊勢物語の原型は古今集以前に成立し、筆者の名は不明、その後長期間にわたり、多人数の手によつて作爲が加えられ、今日見るがごとき形態に整えられたと見るのが一般的である。

この伊勢物語ほど愛されてきた古典はない。源氏物語の作者をはじめ、作家・歌人は伊勢物語を愛読し、その影響をうけてきた。宇津保物語・源氏物語以後、連歌や謡曲から浄瑠璃・歌舞伎にいたるまで、あるいは構想の上に、あるいは引歌として、伊勢物語に触発され取材されたものは非常に多い。

伊勢物語を研究し、鑑賞しようとするとき、深く長く読まれてきたということを常に念頭におかなければならない。なぜ、このように愛読されてきたか。一言でいえば、伊勢物語が自由と愛の文学であつたからである。

藤原氏の政權からしめだされた十世紀初頭の貴族とその周辺の不遇な精神が、批判的・内省的・回顧的ムードのうちに、抛りどころとし救いとしてすがつた最後の生理は、人間の真実をこえ政治権力をこえ、身分をこえた愛情に見ようとする生きかたであつた。端的にいえば、それは風流な生活、和歌の抒情的世界に生きる生活であつた。

それゆえに伊勢物語は、かれらにとつて、当時最高の倫理・美学と考えられた色好みの教科書であつた。恋愛の指導書であり、歌学の案内書であつた。

伊勢物語は、不遇な精神の理想像、業平一代記の構成をとり、和歌を中軸とする説話群から成っている。その組織・内容の解説は省略する。注意したいことは、そのはじめ伊勢物語は音読により享受された文学であつたということである。今日黙読の習慣のなかで製作され享受される文学とは、そこにおのずからことなつた性格が見られなければならない。

なお本書において、本文校合などについては、特に須田哲夫氏にお世話になつた。

一、重要複製翻刻「諸本」

△古本系統

伊勢物語（守屋孝藏氏藏、伝後京極良経筆本複製）古典保存会刊

伊勢物語（最明寺藏、北条時頼筆本複製）古典保存会刊

△朱雀院塗籠本系統

伊勢物語（本間美術館藏、民部卿局筆本）朝日古典全書本 南波浩

異本伊勢物語（伝二条為氏筆本複製）岩波書店

伊勢物語（不忍文庫本複製）古文学秘籍複製会

伊勢物語（泉州本翻刻）国学院大学出版部

伊勢物語（群書類從三百七卷）

伊勢物語（谷森本—天福本も併せ収む—）古典文庫刊

△天福本系統

伊勢物語（影印）武蔵野書院刊

△武田本系統

武田本伊勢物語（伝東常縁筆本影印）武蔵野書院刊

△真名本系統

伊勢物語（統群書類從五百一卷）

△小式部内侍本

『伝二条為氏本』の卷末附載本文——(1)皇太后宮越後本十二段、(2)小式部内侍本二十四段——
二、研究書並びに研究論文

- 伊勢物語研究（窪田空穂、新潮社「日本文学講座」昭6）
- 伊勢物語に就きての研究（池田亀鑑、岩波書店、昭8・9）
- 伊勢物語成立論（倉野憲司、「上中古文学論攷」所収、昭9）
- 伊勢物語の原型を考へる（岡一男、「国文学研究」昭9・5）
- 和歌と新資料（松田武夫、昭18）
- 伊勢物語私考（岡一男、「国文学研究」古典と作家所収、昭11・11）
- 伊勢物語古注釈の研究（大津有一、宇都宮書店、昭29）
- 伊勢物語の成立（高崎正秀、「国語と国文学」昭5・1）
- 伊勢物語の原本について（大津有一、「国語と国文学」昭6・4）
- 異本伊勢物語に就いて（佐佐木信綱、「文学」昭7・2）
- 中世に於ける伊勢物語の研究（大津有一、「国語と国文学」昭9・4）
- 伊勢物語の民謡性（福田良輔、「国語国文」昭11・1）
- 在中将集の成立について（鈴木知太郎、「文学」昭11・1）
- 伊勢物語の成立時代考（鈴木知太郎、「国語」昭16・2）
- 伊勢物語生成考（福井貞助、「国語と国文学」昭24・3）
- 谷森本伊勢物語について（田中宗作、「国語と国文学」昭24・5）
- 伊勢物語散佚諸本管見（関良一、「山形大学紀要」三号）
- 本事詩と伊勢物語（福井貞助、「国語と国文学」昭28・1）
- 伊勢物語の書名と伊勢集巻頭の部分（後藤利雄、「国語と国文学」昭29・7）
- 伊勢物語成長論序説（片桐洋一、「国語国文」昭32・10）
- 伊勢物語の成長と構造―参考伊勢物語所引為家本をめぐって―（片桐洋一、「国語国文」昭33・12）

凡 例

一、本文は、天福本系統三条西家旧蔵本を底本とし、民部卿局筆の塗籠本（本間美術館蔵）をもって校合した。
二、本文は、校合において支障がない限り、教科書としての性質上購読に便利なるように段落、仮名づかい、句読点を正し、適宜漢字をあてた。

三、底本において、仮名づかいに誤りがあると認められた場合には、その本文のかたわりに（ ）で示した。
四、特に次の語は特異なものとして次の方法に従った。

○「男」——底本ではほとんど「おとこ」とあり、特に「をとこ」と断わらない限り、「男」は「おとこ」とあるものである。

○「覧」——底本で助動詞の「らむ」を「覧」の字に当てた場合がある。今、これを「らむ」とした。

○「哉」——「もがな」などという場合に「哉」を以って表わしている場合がある。それも同様「かな」とした。その他「うら山し」も「うらやまし」とした。

五、底本に欠字がある場合には、校合においてこれを補い、対校の部で説明した。

六、文法語釈は必要最低限の説明にとどめたが、できるかぎり問題のある所は分解し、学習者の参考とした。

七、語釈中略称をもって引用した古注の主なものとは次の通りである。

『愚見抄』	（伊勢物語愚見抄・一条兼良）	『闕疑抄』	（伊勢物語闕疑抄・細川幽斎）
『山口抄』	（同・宗祇）	『拾穂抄』	（伊勢物語拾穂抄・北村季吟）
『肖聞抄』	（伊勢物語肖聞抄・牡丹花肖柏）	『臆断』	（勢語臆断・契沖）
『直解』	（伊勢物語直解・三条西実隆）	『新釈』	（伊勢物語新釈・藤井高尚）

- 1 初冠。元服して、冠を加える儀式のこと。
- 2 領地があつたので。
- 3 若々しく、優艶な。
- 4 (荒れた里には) 不似合ひであつたので。

5 信夫搗。しのぶ草の汁で乱れ模様をすりつけた布。

6 追い継ぎて、つづいての意か。

7 序、機会、時の事なりゆき。

8 はげしい、ひたぶるな。

9 風流なこと、優雅なしぐさ。

※―ならなくにのならば断定の助動詞、なくは打消の助動詞の古い未然形に、体言的なものにする接尾語くのついたもの。打消の連体形ぬに接尾語あくがついてなくなつた

〔一段〕むかし、男、¹うるかぶりして、奈良の京、春日の里に²しるよ
しして、狩にいにけり。その里に、いと³なまめいたる女はらから住みけ
り。この男かいまみてけり。おもほえず、古里にいと⁴はしたなくてあり
ければ、心地まどひにけり。男の著たりける狩衣の裾を切りて、歌を書
きてやる。その男、⁵しのぶずりの狩衣をなむ著たりける。

春日野のわか紫のすり衣しのぶのみだれかぎり知られず

となむ、⁶をいつぎていひやりける。⁷ついで面白きこともや思ひけん。^(む)

陸奥の忍もちずり誰ゆへにみだれそめにしわれならなくに[※]

といふ歌の心ばへなり。むかし人は、かく⁸いちはやきみやびをなんしけ
る。

□対校 むかし、男、初冠^{うるかぶり}して―昔、男ありけり いとなまめいたる女はらから―いと
もなまめきたるをむなばら この男かいまみてけり―かのをとこ、かゝ^まみてけり。(本
文中「男」は、底本「おとこ」。以下省略する) いとはしたなくて―いと⁹はしたなく
心地まどひにけり―うちまどひにけり おとこの著たりける―男、きたりける をい
つぎていひやりける。ついで面白きこともや思(底本ひナシ)けん―をいつぎてやれ
りけるとなん。いひつぎてやれりける、おもしろきこととや。みちのくの―みちのく

と見る説もある。には助詞
で逆接的。

1 平安京。

2 容貌。

3 誠実ある男。

4 愛情をうちあけ、契りを結んで。

5 旧暦三月の月はじめ。

主語 ↓ 述語
↓ ↑
修飾語 被修飾語
↑ ↓
主語 述語
※お人 かたちおは 心元 まるむける
※※そをふるーそはふるー清音
でそはふるーと読む

に忍(底本ぶナシ) みだれそめにしーみだれそめけむ 心ばへなりー心ばえなり
□本段の「春日野の」「陸奥の」の両歌は、古今六帖第五「すり衣」に並んで出ている。また「みちのくの」の歌は、古今和歌集卷十四、恋四に河原左大臣(融)の歌として出ている。

〔二段〕むかし、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まだ
さだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女世人にはまされり
けり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあら
ざりけらし。それをかのため男、うち物語らひて、かへり来て、いかゞ
思ひけん、時はやよひのついたち、雨そをふるに、やりける。

おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとして眺め暮らしつ

□対校 ありけり(底本「有けり」改む) 奈良の京ははなれーみやこのはじまりける
時、ならのきやうははなれ まださだまらざりける時にーいまださだまらざりける時
西の京にー西京に 世人にはまされりけりーよの人にはまさりたりけり その人、かたち
よりはーかたちよりは 心なんまさりたりけるー心なむまされりける ひとりのみもー
人所の身も かへり来てーかへり来て やよひのついたちーやよひのつひたち 雨そを
ふるにー雨うちそぼふりけるに
□「起きもせず」の歌は古今六帖第一「雨」と、第五「あした」に同一歌が載せられて
いる。古今和歌集には卷十三、恋三に業平の歌として出ている。

1 想いをかけた、怒した。

2 藤原長良の女、高子。清和天皇の后となり、陽成天皇を生む。

3 清和天皇。
4 普通の人、臣下の身分。

1 皇太后宮。藤原冬嗣つぐの女、順子（五条の后）を指す。
2 （はじめは）なんということなく。

3 通つていたのだが。

4 いつそう。

5 っらい。悲しい。

6 翌年。

〔三段〕むかし、男ありけり。懸想1じける女のもとに、ひじきもといふものをやるとて、

思ひあらば葎むぐらの宿に寝ねもしなんひじきものには袖をしつゝも二條の後の、まだ帝3にも仕うまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のことなり。

□対校 寝もしなん―寝もしなむ 二条の後の―五条の後の まだ―いまだ 仕うまつり給はで―つかうまつらで

〔四段〕むかし、東ひんがしの五條に、大后1 おおきさいの宮おはしましける、西たの対に住む人ありけり。それを本意2にはあらで、心ざしふかゝりける人、ゆきとぶらひけるを、正月むつきの十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり、ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂4しと思ひつゝなんありける。又6の年の正月に梅つばなの花ざかりに、去年こぞを恋ひていきで、立ちて見、居て見、みれど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでゝ

※「月やあらぬ」は「月や昔の月。あらぬ」すなわち「月や昔の月ならぬ」の意。

よめる。

※ 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く／＼かへりにけり。

□対校 東の五条に―東五条に ありけり(底本「有けり」改む) 本意にはあらで、心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを―ほいにはあらでゆきとぶらふ人、こころざしはふかりけるを 正月の十日ばかりのほどに―むつきの十日あまり 人の行きかよふべき―人のいきよるべき 憂しと思ひつゝなん／＼うしとおもひつゝなむ 梅の花ざかりに―梅華ざかりなるに 去年を恋ひていきて、立ちて見、あて見みれど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて―こそをおもひて、かのにしのたひにいきてみれど、こそになるべうもあらず 去年を思ひ(底本「ナシ、補う」)いでて―こそを恋て(ハナハナ) 夜のほのぼのと―ほのぼのと かへりにけり―かゑりにけり

□この「月やあらぬ」の歌は、古今和歌集卷十五、恋五、並びに古今六帖第五「昔をこふ」に業平の歌として出ている。

1 人目をしのぶ所。

2 土塀。
どべい

3 主人、五条の後を指す。

4 警戒させたので。

〔五段〕むかし、男ありけり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。み¹そかなる所なれば、門^{かど}よりもえ入らで、わらはべのふみあけたる築泥のくづれより、通ひけり。人しげくもあらねど、度重^{たびかさ}なりければ、あるじ³きゝつけて、その通ひ路に、夜毎に人をす^あへて、守らせ⁴ければ、いけど

5 二条の後の兄達。藤原国経と基経。

※うちと寝との間に助詞もを挿入したもの。うちもねななは、ぐっすりと寝てしまつてくれればよいの意。ねななのなむは、他に対する願望を表わす助詞、その上のなは完了の助動詞の未然形。

※※まもらせ給ひけるのせは使役。

1 「得難き女也。二条の後のことなり。」(「直解」)

2 呼び会ひの略、情を交す意。

3 率て、連れて。

もえ逢はでかへりけり。さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守はよひく[※]ごとにうちも寝な^ん

とよめりければ、い^といたう心やみけり。あるじゆるしてけり。

二條の後に忍びてまい^るりけるを、世の聞えありければ、兄達⁵のまもらせ^{※※}

給ひけるとぞ。

□対校 ありけり(底本「有けり」改む) いと忍びていきけり^(マ)いと忍いきけり^(マ)みそかなる所なればし^のぶところなれば 門よりもえ入らで^かどよりもいらで^童べの踏みあけたる^塗籠本にナシ ついひぢ^ついぢ^ぢ 人しげくもあらねど^人たかしくもあらねど いけどもえ逢はで帰^りけり^かの男、あ^あはでかゑりにけり さてよめる^あさてつかはしける とよめりければ、い^といたう心やみけり^とよみけるをききてあるじゆるしてけり^いといたうしん^(あ)じけるあるじゆるしてけり 二条の後以下の文、塗籠本にナシ

□この「人知れぬ」の歌、古今和歌集卷十三、恋三に業平の歌として載っている。

〔六段〕むかし、男ありけり。女¹のえ得^ままじかりけるを、年²をへてよばひわたりけるを、からうじて盗み出で、いと暗き^きに來けり。芥川といふ河³をゐていきければ、草のうへに^(お)をきたりける露を、「かれは何ぞ^な」となん男に問ひける。ゆくさきおほく、夜もふけにければ、鬼ある所と

4 雷。

5 矢をいれて背負う器。

6 あな、や、共に詠嘆。悲鳴。

7 地だんだふんで。

8 藤原良房の女、明子を指す。

染殿そめどのの後と言ひ、文徳天皇の女御。清和天皇の母。

9 藤原基経。

10 下臈。官位の低いもの。

11 ただ人。普通の人、臣下の身分の人。

※明けなんのなんは、他に対する願望を表わす助詞、その上の明けは下二段の未然形。

も知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥(おく)にをし入れて、男、弓胡縁(やなくい)を負(お)ひて、戸口に居(を)り。はや夜も明※けなんと思ひつゝあたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神なるさはぎにえ聞かざりけり。やうく夜も明けゆくに、見れば、あて来し女もなし。足7ずりをして泣※※けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひしとき露とこたへて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕つかうまつるやうにてあ給へりけるを、容貌(かたち)のいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄人堀河(せうと)の大臣、太郎国経(くにつね)の大納言、まだげらうにて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるをきゝつけて、留(とど)めてとり返(かへ)し給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて後のたゞに11おはしける時とや。

□対校 男ありけり―男有けり え得(え)まじかりけるを―あふまじかりけるを よばひわたりけるを―いひわたりけるに からうじて盗み出で―からうじて、をんなのころあはせて、ぬすみいでにけり 草のうへにをきたりける露を―草のうゑにをきたる

※※きえなましものをのなは完了の助動詞の未然形、ましは反実仮想の助動詞の連体形。

露を かれは何ぞとなん―かれはなにぞとなむ 行くさきおほく―行くさきはいとほく
夜もふけにければ―夜もふければ 神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降り
ければ―雨いたう降り、神さへいといみじう鳴りければ あばらなる蔵に―あばらなる
くらのありけるに 女をば奥にをし入れて―女をばをくにをし入れて 男―男は 戸口
に居り―戸口にはや夜も明けなん―はや夜も明けなむ 思(底本ひナシ)つつあたり
けるに―思ひついたりけるほどに あなやといひけれど―あらやといひけど 神鳴る
さはぎに―神の鳴るさはぎに え聞かざりけり―え聞かざりけり やうやう夜も明けゆ
くに―やうやう夜の明けゆくを 率て来し女もなし―いて来し女なし 足ずりをして泣
けども―足ずりして泣けど 露と答へて―露と答えて 御もとに―もとに つかうまつ
るやうにて―つかうまつりびとのやうにて ゐ給へりけるを―いたまへりけるを いと
めでたく―いとめでたう 盗みて負ひて出でたりけるを―盗みて出でたりけるを 御兄
河の大臣、太郎国経の大納言―御兄人の堀河の大将もとつね・国経大納言などの
まだ―いまだ いみじう泣く人あるを―いみじう泣く人のあるを とどめて取りかへし
給うてけり―取りかへし給ひてけり 鬼とはいふなりけり―をにとはいゑるなり まだ
―いまだ 後のたゞにおはしける時とか―ただにきさひのおはしけるとときとや
□この段の次に、塗籠本(小式部内侍本、谷森本、神宮文庫本、為家本、泉州本も同
様)には第七段に当たるものとして次の一段がある。

『昔、男ありけり。女を盗みて、い(マ、率)てゆく道にて、「水飲まむ」と問ふに、うなづきけ
れば、杯(さ)なむども具せねば、手にむすびてのます。さて、率(率)てのぼりにけり。女(小式
部内侍本は「おとこ」、この方がよい)はかなくなりなければ、もとの所へゆく道に、か
の清水飲みし所にて、

大原や清和井の水をむすびあげて飽くやといひし人はいづらぞ
といひてきゑかゑり、あはれくといへど、かひなし。』

1 「わぶ」(1) 志ヲ失ヒ、望ミ
ヲ絶タレ、落魄ス。悲観シテ
日ヲ送ル。為ム方ナク差迫リ
テアリ。思ヒワヅラフ。(2)
モノ悲シク思フ。ハカナク思
フ。淋シク思フ。頼リナク思
フ。Ⅱ(大冒海)。
2 いよいよ、ますます。

〔七段〕むかし、男ありけり。京にありわびて東^{あづま}にいけるに、伊勢、
尾張^{おわり}のあはひの海づらを行くに、浪のいと白くたつを見て、
いとゞしくすぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな
となむよめりける。

□対校 あづまに―あづまへ いと白く立つを見て―いと白く立ちかゑるを見て、思こ
となきならねば、男 過ぎ行く―過ぎ行 かへるなみな―かゑるなみな となむよ
めりける―塗籠本にナシ
□この段、塗籠本では八段である。

〔八段〕むかし、男ありけり。京や住みうかりけん、東^{あづま}の方に行きて住み
所もとむとて、¹ ともとする人ひとりふたりして行きけり。信濃^{しなの}の国、浅^{あさ}
間の嶽^{たけ}に、けぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽^{たけ}に立つ煙をちこち人[※]の見やはとがめぬ²

2 遠近人で旅人の意(臆断)、
遠方人で昔男自身(新釈)。
旅人であらう。

□対校 ありけり(底本「有けり」) この八段と九段は塗籠本では一段(第九段に当る)に

※見やはとがめぬは、反語を表わす係りの助詞やがぬで結ばれているから、ぬは打消の助動詞の連体形。反語はけつきよく打消することになるから、見とがめずはあらず、すなわち見とがむの意となる。

- 1 世に益無き者。
- 2 強くそう思つて。
- 3 旧から。

4 愛知県碧海郡知立町の東。

5 川が八方に流れているので。

6 馬から下りてすわつて。

なっている。そして冒頭は天福本でいう第八段の冒頭ではなく、「信濃なる」という歌の前まで、第九段の冒頭が入っている。分り易いため、それを記すると、
「昔、男ありけり。其男、身はえうなき物に思ひなして、京にはをらじ、あづまの方に住むべきところもとめにとていきけり。信濃の国浅間の獄に煙たつを見て、」
とあつて、「信濃なる」の歌に入る。歌の言葉中、「をちこち人」が、塗籠本では「をちかた人」となっている。そしてこの歌の続きの文は「もとより友とする人」からである。

〔九段〕むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、
「京にはあらじ。東の方に住むべき国もとめに」とて行きけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木のかげにおり居て、乾飯くひけり。その沢に燕子花いとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心をよめ」といひければ、よめる、

7 「唐」は衣の美称。「唐衣」は「着る」の枕詞。「唐衣きつゝ」は「なれ」の序。

8 潤びた。ふやけた。

9 静岡県志太郡と安倍郡の境にある。

10 思いがけない目。

11 仏道修業の僧が男（業平）にあった。

12 ことずける。

13 旧暦五月の末。

14 形状。

15 塩水を汲み、かけて、日に乾かし、塩分を固着させるために、砂を高く積み上げたもの。

16 群がっていて。

7 唐衣きつゝ、馴れにしつましあればるゝ来ぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれないひのうへに涙おとしてほとびにけり。行き行きて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かえでは茂り、もの心ぼそく、すぐろなるめを見ることゝ思ふに、修行者あひたり。「かゝる道はいかにかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり
富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いとしろう降り。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん
その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは塩尻のやうになんありける。猶行きくゝて武蔵の国と下総の国との中に、いとおほきなる河あり。それを隅田河といふ。その河のほとりにむれゐると思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかなと、わび